

「シークレット・ミーティング」

警察署での聴取が終わり、家路につく前に私達は晩御飯を食べるために街中のファミレスに入っていた。

三百グラムのハンバーグが載っていた鉄板はすでに空になり、すっかり冷えてしまっている。向かいに座っている綺羅くんの手元に視線を向けると、二千元近くする大容量のパフェが入っていたガラス瓶がすっかり空になっていた。

時刻は午後九時。客もまばらになっていた。

「…さて、おなかも満たされたことだし、さっきの話の続きでもしよるか、瑠花」

綺羅くんが食後の紅茶を口に運んでそう告げた。彼の口の端は上がっていたけれど、淡い翡翠の瞳は笑っていない。静かに怒っている、そんな雰囲気だった。

「君だつて知ってるはずだ。幽界の者と戦い傷つけば、精神にも身体にも傷を負う。最悪死に至ることだつてある。僕らのように霊力を扱える人間が訓練を積んだつてそうなるんだ。それを素人にやらせるなんて、無理がすぎる」

淡々と、冷静に、それでいて怒気の含まれた言葉に、私はごくくりと唾を飲んだ。目の前で恩師が悪魔に殺されたと言う彼が知れば、そんなことは絶対に許さないと分かっていたからこそ、

私は霊装システムの開発に秘密裏に携わっていた。偶然にもそれが明るみに出て、私はこうして詰められている。でも――。

「さっきも言ったけど、私や貴方だけじゃ数的に手に負えないつていう現実だつてある。それは理解してくれるわよね？」

「それは……そうだけど」

綺羅くんの氣勢が削れていく。ここ数か月、夜の深い時間にこの神原市を縦横無尽に飛び回って悪魔を倒しては、霊力が尽きて私のところに『充電』しに来る日々を送っているのだから。

使命だ宿命だなどと言って一人で何でも背負おうとするこの人が倒れてしまうことの方が状況的に危険だし、その状況を理解できないような人ではないはずなのだ。

とはいえ、そんなことを口外したら「僕の力が足りないというのか」と不貞腐れるのが目に見えている。

「しばらくは、私が付いて霊装時の訓練は積ませる。あのシステムは、霊装してさえないなければ、幽界からの干渉は基本的に受けられないわ。基礎的な体力づくりとかは普段からやつてもらえばいい」

それで安全性が保てる保障なんてどこにもないのは、私だつて十分分かっていなければならないけど、と心の中で続けた。

「そんな簡単なことじゃないのは、君も分かっているでしょ。普段の祓魔の依頼もこなしつつなんて、より難しい」

だから、こう言われるのも想定済みだ。

「そうかもね。……だからお願いがあるの。私と一緒にいられないこともあるだろうから、綺羅くんも、あの三人のことをフォローしてほしい」

私の提案に、綺羅くんが諦めたように一つため息をついた。

「うん、わかったよ。君はそう言うと思ったし、僕もそうするつもりだった」

「え？」

少し意外な答えが返ってきて、素っ頓狂な声が出た。

「でも、それなら僕も君にお願いがある。僕は彼らを甘やかす気は毛頭無い。僕らと同じレベルで戦えるようになるまでは、霊装中は厳しく接するつもりだ。だから、しばらくは僕の正体を伏せてほしい。ハクにもそう言っておいて」

淡々と言葉を並べる綺羅くんに、かえって安堵と感謝を感じた。きつと、既に心の中で決めたことだったのだろう。それなら、私もそれに応えるしかない。

「分かったわ。私もその方がいいと思うもの」

「それともう一つ。君からもしつかりあの三人にリスクを示した上で本当に戦うのかを確認して欲しい。僕たちは……最後にハッピーエンドを迎える物語のヒーローじゃないんだから」

「ええ。よく言い含めておく」

綺羅くんは、綺羅くんなりにちゃんと三人のことを心配している。自らが目の当たりにした最悪の結果にならないようにど

うしたらいいか。もしかしたら私よりもずっと真剣に考えているのかもしれない。

「ありがとう」

自然と、感謝の言葉が口をついて出た。

「仕方なくやるんだから、割に合うリターンは欲しいな」

「考えておくわ。……あ、そうだ、霊装中に遭遇したら何て呼べばいい？」

綺羅くんは一瞬考えて、すぐに口を開いた。

「そうだな……じゃあ、『ルーク』でいいよ」

「ルーク？」

「向こうではその愛称で呼ばれていたんだ。『光を運ぶ者』って意味。日本名と似てるでしょ。シャムもルークって呼んでるし」

そこまで言って、ふふ、と綺羅くんは笑った。

「君の『ルカ』って名前もね、イタリアじゃ『ルーク』と同じ語源の名前だから……何だか変な感じだよ」

——ああ、今度は目もちゃんと笑ってる。私の心の緊張が、少しだけほぐれていく。自然と、私の顔にも笑みが浮かんだ。

「なんだか、自分のことのようなよね。全然似てないのに」

「だからいいんじゃないかな。互いの足りないところを補って、やっとなん前なんだ、僕たち」

だからこそ手を携えて、超えるべき壁を超えていく。

二人で、そして、みんなです——。